

元旦礼拝

新年あけましておめでとうございます。

今年もどうぞよろしく願いいたします。

今年1年も、溢れんばかりの主イエス様の愛と慈しみに、皆さんお一人お一人
が、そして皆さんに繋がっている方々お一人お一人に満たされることをお祈り
いたします。

賛美いたしましょう。 聖歌584です。

「神のみわざに目を留めよ」

伝道者の書7：13－14

January.1.2021

伝道者の書7：13－14 (パウロ)

Preface

2021年の主題聖句を、伝道者の書7：13－14の御言葉といたしました。

壁に書けられた聖句を一度、みんなで声に出して読んでみましょう。

(オンラインの方々は、画面に出る御言葉を読んでみてください。)

**「神のみわざに目を留めよ。順境の日には幸いを味わい、逆境の日にはよく
考えよ。これもあれも、神のなさること。」(パウロ)**

去年一年間、私自身、読むか、聞くかしながら、ほぼ毎日聖書の言葉に触れて
きましたが、その聖書の御言葉との触れ合いの中で、今読みました伝道者の書
7：13，14の御言葉と再会しました。

そして、心を驚つかみにされました。

それまで何度も目にし、読んできたはずの御言葉ですが、こんなにもこの御言
葉が迫ってきたことはないように思います。

初めてこの御言葉を目にしたのは、20年程前のことだと思いましたが、13節
の「神の曲げたものを、だれがまっすぐにできるだろうか。」という言葉の意味
が分からず、「何を言ってるんだろうか？」と思いました。

「そもそも神様は、曲がったことを真っすぐにされる方で、真っすぐなものを
曲げるような方ではない。」と聞いていたので、「神が物事を曲げる」という
言葉が、すんなり入って来ませんでした。

でも、去年一年間を通して、「神が曲げたものを、だれがまっすぐにできよう
か。」というこの御言葉のスケールのドでかさの一端を垣間見たような気がしま

す。

これまで私が人生という現場の中で、神様に期待していた“曲がったものを真っすぐにすること”と言えば、病があればその病を癒し、問題が起こればその問題を取り除き、欠乏すればその欠乏を満たし、山がそびえ立っていればその山を動かし、行く手を阻む川があればその川をせき止めるようなことです。

つまり、私が病だと思ふものは神様にとっても病であり、私が問題だと思ふものは神様にとっても問題であり、私が欠乏だと思ふものは神様も欠乏だと思つて下さり、私が行く手を阻む障害物だと思ふものは神様にとっても障害物だ。」と、思っていました。

要するに、私の側から見て“曲がっている”と考えるものは、神様も当然“曲がっている”と考えてくださるはずで、その“曲がったもの”を、必ずや正してくださる方が、神様だと思つていたわけです。

そこには、神の主権を認める余地なんかありません。

私の価値基準に照らし合わせて正しいことは、神様の目にも正しいし、私の目に間違っていることは、神様の目にも間違っているという、自分勝手に浅はかな正義感ゆえに、神様を自分の思い通りに動かす道具のように勘違いしていたことを、去年一年間を生きていく中で教えられました。

Part One

私たちは毎年年末になりますと、その年がどんな年だったのかを振り返りますが、その内容は、普通、人それぞれ違うと思います。

置かれている環境も違えば、備わっている条件も違いますし、性別、年齢、健康状態、住んでいる所、みんな違いますから、過ぎた年を振り返った時の思いや言葉は普通なら人それぞれ違いますが、去年に限っては、日本のみならず、世界中の人々が、異口同音で同じ単語を口にせずにはいられないでしょう。

言わずもがな、“コロナ”です。

去年の元旦礼拝の時には、すでに新型コロナウイルスのニュースが入ってきてはいましたが、まさかここまで、日本のみならず全世界を掌握してしまうほどの事態になるとは、一部の人たちを除いて、ほとんどの人が思つてもみなかったでしょう。

年を跨いでも、その影響の真っ只中にあるような状態です。

そして、世間一般的に誰もが、この新型コロナウイルス感染症の事態を緊急事態だと考え、普段の生活とは違う状態だと思っています。

つまり、それまで真っすぐだったものが、曲げられたと考えています。

だから、一日も早く事態の終息を図り、この曲がった状態を再び真っすぐにしなければならぬと躍起になってはいるものの、なかなかその終息の目途が立たない現状にあります。

この曲がった事態を再び真っすぐにできると期待して、去年1年間様々な取り組みをしてきましたが、なかなか真っすぐになりません。

その一方で、「果たして、私たち人間が曲がってしまったと考えている事態が本当に曲がっているのだろうか？ いや、むしろ逆に、本来真っすぐだったものを、これまでの人間活動ゆえに曲げ続けてきたのではないか?!」なんていうことが言われるようにもなりました。

経済活動が止まって世界の平均気温が下がったとか、様々な排ガスが抑えられて空気が澄んでそれまで見えなかった山が見えるようになったとか、絶滅危惧種の繁殖が回復したとか、地球規模の回復の報告が成されて人間生活の有りようの改善が叫ばれました。

そして実際に、全世界規模で二酸化炭素の排出量を抑える一環として、20年後30年後までには、ガソリンで動く車の製造を辞めましょうなんて言う取り決めまで出来ました。

またそれまで特別な努力も必要なく、普通に話したり、一緒に時を過ごせたりすることが、こんなにも貴いことだったのかと、

簡単に会えなくなった親が恋しくなり、子が孫が同僚が友人が恋しくなって、人は人あっての人なんだと感じたりもしています。

もちろん、このコロナ禍にあって、経済的困窮に陥ったり、感染症ゆえに苦しんでいる人達がいるという事実はありますが、

“この曲がっていると思われる事態”が、ただ訳もなく曲がっているのではなく、あえて、曲げられているのではないかと感じずにはられません。

すると、伝道者の書7：13の言葉が迫力をもって、迫って来ます。

Part Two

伝道者の書7：13（パワポ）

「すべての物事が、神の御手のうちでなされていることを信じなさい、見出しなさい。」ということです。

確かに世の物事には、曲がったことがあるけれども、その曲がったものが、人の目から見て曲がっているのか曲がっていないのかという、人間的な短絡性に依存した見方ではなく、

一見した限りではわからないかもしれないけれども、実のところ、そこに愛なる神の情け深い慮り（思ん量り）があることを見出すことを諦めてはならないということです。

言い換えますと、「曲がったのではなく、神によって物事が曲げられている」という、神の主権を認めなさいということです。

もっと言いますと、

唯一永遠に変わることのない方でありながら、天地万物のすべてを変えることの出来るお方であり、

遙か昔からおられる方であるにもかかわらず、いつの時代でも遙か先行く最先端であられ、

まどろむこともなく眠ることもなく常に働いておられるにもかかわらず、常に安息を楽しみ、

底なしに分け与えても、いつも満ちており、

憤られることはあっても、常に平和であられ、

比較に値するものは皆無であるほどの永遠の栄光のうちにおられるにもかかわらず、どんな些細な痛みにも同情し、癒し、慰め、力をお与えになり、

すべてを所有し、すべてを創造し、すべてを助け、すべてを満たし、すべてを育み、そして満足される、

到底推し量ることの出来ない知恵そのものであられる、恵み深い愛なる神様を信頼する信仰にしがみついて、物事を見るようにということです。

ここで言うしがみつくととは、手の平と手のひらを合わせて手をつなぐことも出来ないほどの幼い子供が、雷でも暗がりでも地震でも高いところでも水の上でもどんな危機的状況でもいいのですが、親の手の指を痛いほどにギュッと握り締めるか、全身を使って親の脚にしがみついて離れないようなことです。

今まさに直面している緊張と不安と恐怖の局面を生き抜く唯一の方法が、親の指を力いっぱい握り締めることか、親の脚にがっちりしがみつくことであって、この父ちゃん、または母ちゃんと一緒なら何とかなるし、何とかしてくれるし、どんなことがあっても必ず守ってくれるという本能的に自然にあふれ出す信頼感のようなものです。

じゃなんで、幼い子供は、親を頼り、信頼するのか？

それは、経験しているからです。

自分が困った時に、親が助けてくれた、守ってくれた、与えてくれたという経

験が無意識のうちに子供の中に蓄積されて、親への信頼として現れてきます。

つまり、親から施された過去の恵みの経験を、体が覚えているということです。だから、迫っている緊張と不安と恐怖の場面でも、この経験が発揮されるわけです。

人の命を創造される神様は、生まれながらにして赤ん坊が親を頼り、信頼するようにお造りになりました。

そして、その赤ん坊の親を信頼するという本能が、親から与えられる恵みの体験を積み重ねていくと、さらにその信頼が強固になります。

その強固にされた信頼が、指をギュッと握り締め、脚にしがみつくと形で現れるわけです。

しかしやがて、親の手の指を握る程でしかなかった幼い子供の手が、親の手の大きさほどに成長し、また、親の脚にしがみつくところか、親と背丈が同じかそれ以上に成長しますと、

施された親の恵みは当たり前になって、鬱陶しく思えて、自分の力で生きていけると反抗し、親がそれまで施してくれた、また現在も続けて変わらず施してくれている恵みなんか見えなくなり、気付かず、親がこれまで与えてくれた愛情なんか分からなくなります。

時には、親の存在が煩わしいと、怒ることもあります。

そしていつ、親の成してくれたわざと施してくれた恵みが、再び見え、気付く、感謝できるのかと言いますと、

それまでまっすぐだったものが、曲がってしまった時です。

当たり前のように食べ、当たり前のように寝て、当たり前のように楽しんで、当たり前のように喜んで、当たり前のように遊んで、当たり前のように動いて、当たり前のように働いていた時から、

食べられず、寝られず、楽しめず、喜ばず、遊ばず、動けず、働けなくなった時、親の恵みが思い出されて、身に染みてきます。

親がその恵みを子に施すために、どれだけ苦労し、どれだけ痛み、どれだけ我慢し、どれだけ耐えてきたのかが、見えてきます。

そしてその時、初めて新たに、親の恵みがひしひしと心に染み入ります。

伝道者の書の著者であるソロモンが言わんとしていることは、正にこのことです。

Part Three

聖書は、天地万物をお造りになった唯一の天の神様のことを何と言っていますか？

父です。 父なる神です。

神は父なる神であって、私たち人間は、その父なる神の子です。

父なる神は子なる人間に、恵みを与え続けて来られました。

ずーっと、ずーっとです。

私たちが生まれる遥か前から、ずーっと、ずーっと恵みを与え続けてきました。

恵みを与えるために、痛みがあろうと、我慢があろうと、忍耐があろうと、愛しているがために、父として恵みを施し続けて来られました。

クリスチャンばかりではありません。 すべての人間にです。

マタイの福音書5章を見てみましょう。

マタイの福音書5：45（パワポ）

神は分け隔てなく、すべての人間の父であることを体現され、父であることを知って欲しいと思われ焦がれています。

たとえ、父であることを子である人間がわかっていなくても、父であることを辞めずに、恵みを施し続けるほどに思い焦がれておられます。

親として一番心が痛み、傷つくのは、
子が親であることを認めない時です。

神様はその痛みを抱き続けながらも、なおも父であろうと、父としての責任を果たすべく、変わらずすべての人の上に太陽を昇らせ、すべての人の上に雨を降らせながら、ありとあらゆる恵みを与え続けておられるのが、父なる神です。

そんな父なる神の恵みを受けて、その恵みなしには呼吸さえも出来ない存在であるにもかかわらず、

施された恵みをきれいさっぱり忘れ、神なんかいないと、神がなんぼのもんじゃないと、神の存在を鬱陶しがり、反抗し、施してくれた恵みを食いつぶしながら、ここまで人類は歴史を刻んできました。

それでもなお、父なる神は、父なる神であることを諦めることなく、主イエス・キリストの姿をもって、

神を父と認めない恩知らずなどら息子、どら娘たちに、父の愛がどれほどなの

と変えてあげたではないか？

それらすべての恵みを、あなたは具体的に覚えているか？」と、語り掛けてきます。

では、何でこれほどに語り掛けておられるのでしょうか？

それはある意味、信仰とは、どれほどに日々の生活の中で、**具体的に**恵みを数えることができるのかにかかっているからです。

Part Five

私が学んだ神学校の先生が授業の中で、ご自分が、神の施してくださった恵みを忘れないためにしていることがあると、話してくださったことがあります。

先生が、奥様と子供二人を連れて、アメリカのダラス神学校に留学するためにダラス国際空港に降り立った時の話です。

少なく見積もっても5年はかかる留學生活のために持って行った全財産は、3、000ドルでした。

家族4人が5年以上暮らすのは、全くもってお話にならないぐらいの金額です。

それでも、何とか集めたお金を大事に胸ポケットにしまって、空港に降り立ちました。

無事入国審査も全部終え、空港の外に出て、胸ポケットのお金があることを確認するために、胸ポケットに手を入れたところ、お金がないんです。

「いやいや、勘違いだ。」と、また、ポケットに手を入れるのですが、お金がありません。

どのポケットを探してもお金がないんです。

そこで、「ああ、妻に預けたのかもしれない。」と思い、奥様に聞いてみても、「預かっていない。」とおっしゃるのです。

掏られたのか、落としたのか分かりません。

留學生活の第一歩が、“持ち金全部紛失”というとんでもない事故から始まりました。

そこで先生は決心したそうです。

「ああ、今日のこの飛行機チケットの半券は、一生大事に僕の胸ポケットにしまっておこう。なぜなら、父なる神様が、私たちの留學生活を、責任をもって守り導くと宣言された日だから！」と決心したそうです。

意味がわかりますか？

悲観するどころか、「神に寄り頼め」というメッセージだと受け止めたんです。

先生は授業の中で実際に、背広の胸ポケットから、そのチケットの半券を取り出しながらこうおっしゃいました。

「父なる神様は、私たち家族4人の5年間の留學生活に必要なものすべてを、満たしてくださいました。この飛行機チケットの半券は私たち家族の一生の宝物であり、神様が施してくださいました恵みを忘れることがないようにいつも持ち歩いている証拠です。」

すごいですね。

父なる神の施してくださいました恵みを忘れないように生きようとするその先生の生き方が、もうカッコよくて仕方がありませんでした。

しびれました。

正に、曲がってしまった事柄を曲がってしまったものとして見るのではなく、神が曲げたものだとして信じて、神のみわざに目を留める生き方ですよ。

Conclusion

私たち人間に、そして今、日本を含めた全世界に求められる根本的で、核心的で、最も大事なことは、曲がってしまった状況を再び人の手で真つすぐにするのではなく、神の手によって曲げられたという事実を認め、神と人が父と子の関係であるということをおぼえ出すことです。

神と人が、父と子の関係にあるというのは、何も突然今、降って湧いた新しいことではありません。

親の恵みを忘れた子が、親の恵みを思い出し、その恵みがひしひしと心に染み渡るような事と同じです。

どの命も神の手によらない命はありません

すべての命が、神の手によって、深い愛情のうちに育まれた命です。

これを思い出すことが、神のみわざに目を留めることです。

ただ残念ながら、私たちは神の恵みに目を留めようとしない世界に生きています。

物事が曲がったと思えば、神なんてものは存在しないんだと結論付けてしまいます。

そして、曲がったと思われるものを人間の力で真つすぐに出れると考え、再び真つすぐにしようと躍起になり、真つすぐにしようとします。

しかしもし、真つすぐにしたと考えるような状態になったとしても、

この世の中曲がったものだらけで、真つすぐにしなければならぬように思われることが、次から次と出てきます。全くもって切りがありません。

もっと厄介なのは、人間の力で真っすぐにしたと思ったのに、実は、取り返しのつかない程にねじ曲げてしまったものなんか、世の中そこら中に存在します。

正に、創世記1章にあるように茫漠とした世界です。

曖昧で、不明瞭で、おぼろで、おぼつかない世界です。

そんな世界にあって、私たち人間にとって救いとなるのは、放蕩息子が父の恵みを思い出すように、神のみわざに目を留めることです。

曲がったものだらけの中でも、神のみわざに目を留めることこそ、救いです。

今年1年、私たちに何が起こるのか、何があるのか全く分かりません。

がしかし、ひとつ、どんなことが起こっても間違いなく確かな道があります。

神のみわざに目を留めることです。

どんな小さなことでも、神のなされた、施してくださった恵みに目を留めることです。

これは、道であり、真理であり、いのちであられる主イエス・キリストに目を合わせることでもあります。

最後にヘブル書12章を見てみましょう。

ヘブル人への手紙12：2-3 (パウロ)

気落ちすることがあっても心が元気で、疲れることがあっても、疲れ果ててしまわない唯一の道は、信仰の創始者であり完成者である主イエス・キリストから目を離さないことです。

誰も生きたことがない、誰にとっても未知の2021年、この唯一の確かな方から目を離さず、みんなで共に生きていきましょう。

お祈りいたします。

祝祷：伝道者の書7：13